

3年ぶりの蒼天祭花火



北海道情報大学同窓会

蒼天会 会報 Vol.20



発行:2022年12月

更なる研鑽の場-大学院

大学院研究科長

高井 那美



本学大学院経営情報学研究科(修士課程)は平成8年に開設され、約200名の修士生を社会に送り出してきました。当初は教員の研究室が並ぶ棟の2階に大学院生室があり、遅くまで研究に没頭している大学院生の姿を見かけた方もいらっしゃると思います。現在はeDCタワー9階に場所を移したため、あまり大学院生の普段の様子を目にする機会は無いかもしれませんが、1フロア全てが大学院生のための空間という恵まれた環境のもと、日々の学修に勤しんでいます。

近年の情報化社会の動きはあまりに早く、その真っ只中で自らの人生を切り開いていくには、かつてとは違った価値観に対応していく能力が求められています。多様性が尊重

模擬店前の歩行部分にレンガを敷き歩きやすくなりました



されるようになり、その中で自分の存在価値を高めるためには、自らの「強み」を磨き上げていかななくてはなりません。その場が大学院です。

本学大学院は、デジタルビジネス・マネジメント、システムデザイン、クリエイティブメディアの3分野を擁し、来年度からは医療・ヘルスケアIT分野を開設して4つの研究分野を展開します。本学学生の場合、4年次に大学院の授業を受講できる特別科目等履修生という制度があり、入試は推薦(6月頃)・1次募集(9月)・2次募集(2月)の3回設定されています。推薦入試(小論文・面接)の受験には条件がありますが、入学検定料免除という大きなメリットがあります。1次・2次募集では、外国語(英語)・専門科目・面接の試験があります。

大学院では2年間で修士論文等の作成を含む30単位以上を修得することにより、修士(経営情報学)の学位が授与されます。学部では4年間で124単位以上が必要なため、比較すると時間割にかなり余裕があることがわかります。それは、自らの学修・研究に十分に時間を注ぎ、修士論文等を完成させるためです。また、1学年の定員も15名となっており、少人数で密度の濃い授業を受講できます。こんなに贅沢な時間は無いでしょう。実際、社会に出てからも、チャンスがあれば学びたいとお考えになる方は大勢いらっしゃると思います。本学大学院にも、かつての卒業生が再び学びに来ることが増えてきました。そのような方のために、1次・2次募集では社会人特別選抜試験(小論文・面接)も行っています。

在学生はもちろん、卒業生の皆様も、入学したい気持ちがあれば、大学院でかけがえのない宝物のような時間を過ごしていただきたいと思います。

人生のキーパーソン

システム情報学科
平成24年(2012年)卒業
三浦 啓太郎さん



人生のキーパーソンとなる二人を紹介しながら、私のお話をさせていただければと思います。

私は恥ずかしながら2回離婚を経験しています。しかし、それが大きなきっかけとなり、現在在住している十勝の芽室町での仕事に集中します。当時、先代から続く金物屋の事業を継いだものの、ビジネスの柱を一本とするには危険だと、父の病気によって実感します。

私は、「リスク分散」を考え、ドローンを使った動画制作を始めました。レースドローンの操縦やドローンの分解・再構築が楽しくて惹き込まれました。その中で、北海道はドローンの素材の宝庫であることに気づき、芽室町を発信していきたいという気持ちが芽生え、北海道十勝の良さがPRできる映像制作などに取り組んできました。

そして一人目のキーパーソンとなる現妻と出会います。結婚は懲り懲りだと最初は思っていたのですが、何より彼女の第一印象が良かったのです。過去いろいろあった自分を包み込んでくれるような人でした。私の仕事は多岐に渡っていましたが、彼女は仕事のことに関して触れません。立ち行かなくなった時だけ、心を軽くする言葉をくれ、その緩急には、敬服するばかりです。母としての強さも感じます。過去の理解をしつつ、今の家庭を大切にしたいと、示します。今があるから未来を築くことができる。それを教えてくれました。

そして二人目のキーパーソンである上妻(アゲツマ)さん。

実は男性で、彼の苗字です。大学で出会いました。ズバリとものを言う、稀有な存在で、忸度なくものを言います。私が芽室町に帰って父の事業承継をしようとした時に彼を引き摺り込んだのですが、69歳の親父と30歳の上妻は馬が合わず、結果二人は決裂します。そこで私は、上妻に出資。キャンプ事業への転換を提案し、彼はキャンプラボというアウトドアショップ経営を始めました。商品販売だけでなく、レンタルサウナやキャンプのアテンド等、撮影のサポートを依頼することが多くなり、自分の大切なビジネス

パートナーとなりました。

現在の私は、先代から続く金物店の取締役代表、映像会社Rabbitsの代表取締役としてドローンパイロットやカメラマン、配信業務を担当。日本ふるさと創生株式会社 芽室支店長として芽室町のふるさと納税返礼品を出品し、地域活性化に努めています。そして、先日芽室町で初開催された食べ物・音楽・サウナ・キャンプ等十勝の魅力を終結した「かちフェス」の実行委員として、奮闘し、1万人を超える集客のイベントを成功させました。

別れの後には、新たな出会いがある。今が幸せと胸張っていえませ。特に今回紹介した二人は私の人生を変えたキーパーソンであり、感謝しかありません。北海道の地で、今までに出会った人や今後出会う人のご縁を大切に、私のふるさとである北海道、十勝、芽室町のために更に貢献していきたいと思っています。

株式会社三浦商店 <https://msyouten.com>
株式会社Rabbits <https://rabbits.movie>
株式会社CAMPLABO <https://camplabo.jp>



HEITAROMIURA1989



今年6月に参加したJAPAN DRONE LEAGUE ドローンレース



「かちフェス」実行委員(最前列 一番右が本人)

TOPICS

本学軟式野球部が新人戦で優勝

令和4年6月25日から7月4日まで江別市営球場で開催された北海道地区大学軟式野球連盟主催の新人戦が、参加大学8大学のトーナメント形式で行われ、決勝戦で北海学園大学(春季1部リーグ優勝)を4対3で破り、本学の軟式野球部が見事優勝しました。

また、軟式野球部は春季4部リーグで優勝し、3部リーグ昇格を決めています。

この軟式野球部の快挙をお祝いして、同窓会から記念品として軟式球120個を贈呈いたしましたことをご報告いたします。

秋季3部リーグ戦で全勝優勝、2部昇格を決め、快進撃が続いています。



蒼天祭「同窓会限定企画」開催報告

例年蒼天祭と同時に「同窓会ホームカミングテイ」を開催していましたが、新型コロナウイルスの感染が収束していないため中止とし、「同窓会限定企画」として卒業生にモギ券を配付しました。今回は約70名の卒業生にご来場いただきました。ありがとうございました。

2日間とも天気に恵まれ、久しぶりの対面での蒼天祭は、在学生、卒業生、教職員等にとって例年以上に特別な時間となりました。

事務局長就任のご挨拶

事務局長
瀧澤 浩基さん



会計課、就職課、教務課と渡り歩き、この令和4年4月から本学の理事・事務局長という大役を仰せつかりました平成6年3月卒、経営情報学部二期生の瀧澤浩基です。私が学生の時、本学は教室と実習室、研究室と小さい食堂、図書室、体育館があるだけで、学生数も経営学科と情報学科の2学科で入学定員は200名の本当に小さい大学でした。しかし、現在は松尾記念館や学生寮、eDCタワーなどが建ち、テニスコートや野球場、グラウンドも整備され、通学生約1,800名、通信教育部生約4,400名(科目等履修生含む)と合計で6,200名以上の学生が学んでいるのを間近で見ていると非常に感慨深いものがあります。また、通信教育部や大学院、情報メディア学部、医療情報学部を開設し、大きく発展してきたことを振り返ると、時が経つのはあっという間だったと感じています。当時の専任の先生方で、現在でも在職されているのは数学の松井先生一人だけになってしまいました(ちなみに英語のサイモン・ソーラ先生は当時非常勤でした)。最近では、卒業生が起業した会社に本学の学生が就職したり、卒業生が子供とオープンキャンパスに参加するこ

とや卒業生の子供が入学することも多くなり、大変嬉しく感じます。

思い返すと、私が本学で働いているのは、学生時代、就職活動で自己分析や業界研究等は行ってみました特にはやりたいことがあるわけではなく、ゼミナールの田中祐二先生から、職員の採用があるので受けてみないかと言われたのがきっかけです。そんなやりたいことがよく分からなかった私が就職課で働き、学生に進路指導を行っていた頃、よく「やりたい仕事が決まらない」という学生がいました。私はその時、「やりたい仕事が決まっている学生は素晴らしいと思うが、決まっていないことはいけない訳ではない」と正直に話していました。実際、現在でもやりたい仕事は何かと聞かれると、私自身本学で勤務できたことは幸せであり、学校経営の知識をもっと身に付け母校を発展させたいという気持ちはもちろんありますが、答えに窮するのが本音かもしれません。

以前、キャリアデザインには、「いかだ下り」と「山登り」の方法があることを学んだことがあります。「いかだ下り」とは、目の前にあるものに懸命に取り組む中で目標を発見していく偶発的な方法であり、「山登り」は明確な目標を定めて計画的に取り組む方法ですが、どちらが正解という訳ではないと思っています。ただ、13年間学生の就職指導を行っていた私が最近思っているのは、いつまでもやりたいことが何なのかを追い求め、学び続けることが大切なのではないかということです。

卒業生の皆さん、同窓会に協力を得ながら今後も本学を発展させて参りますので、ぜひ遊びに来てください。お待ちしております。

体育祭・蒼天祭を終えて

学生実行委員会 委員長
システム情報学科3年

川村 恵利緒さん



新型コロナウイルス感染症等により中止やオンライン開催となっていた体育祭・蒼天祭を3~4年ぶりに会場開催で実施することができました。多くの学生が経験のない両イベントですが、学生実行委員会生も経験がなく、先輩方や教職員の方々のご協力により無事に成し遂げることができました。

今年度の体育祭は感染対策を踏まえソフトボール・ドッジボール・ソフトテニス・ポッチャを実施しました。特にポッチャは東京パラリンピックを参考に今年初めて取り入れた競技で、誰でも楽しんでいたけるようにと思い取り入れました。親しみやすいプレイ方法でありながら、戦略性のあるルールで初めてプレイしていただいた方にも楽しんでいただけました。例年人気のあるソフトボールは今年も盛況で、熱い戦いが繰り広げられました。また、例年開催をしておりますジンギスカン交流会ですが開催を取りやめ、学生支援の一環として体育祭に参加していただいた方に学食とペットボトル飲料の無料提供を行いました。競技だけでなく飲食の面でも学生の皆様に喜んでもらえる体育祭にすることができました。学生だけでなく、教職員も楽しめる4年ぶりの体育祭になったと思います。

10月8日(土)、9日(日)は3年ぶりに蒼天祭を会場開催することができました。今年度の蒼天祭のテーマは『Re:boot ~私たちの青春~』で

した。対面授業や会場開催の蒼天祭が戻ってきたことで、新たに気持ちを再起動(reboot)したいという気持ちを込めました。学内ではそれぞれのゼミ・サークルの特色を活かした展示や様々な模擬店が出展されました。さらに蒼天祭の最後には花火の打ち上げを行いました。秋の夜空に280発の様々な花火が打ち上げられ、2日間を明るく彩りました。2日間合わせて1,000名程のお客さまにご来場していただくことができました。アミューズメントやSO-TEN LIVEの取り止め、一部の団体には感染対策のため展示の変更をしていただくなど規模を縮小しての開催でしたが、新たな形の蒼天祭を楽しんでいただけたと思います。

数年ぶりの体育祭・蒼天祭で学生実行委員会としても慣れない部分が多々ありましたが、両イベントとも無事に成功したことを嬉しく思います。今年は以前までとは違い、各所に新型コロナウイルス感染症対策を施さなくてはならず、例年通りに開催できないもどかしさがありました。そんな中でもご助力いただきました教職員の方々やゼミ・サークルの皆様、ご協賛を頂きました同窓会や企業の方々、ご来場頂きました同窓生や地域の皆様のおかげで体育祭・蒼天祭が良い思い出となりました。心より御礼申し上げます。来年度以降もより良い体育祭、蒼天祭を開催してまいります。学生実行委員会一同、来年度以降も努力してまいりますので今後ともよろしくお願い致します。

